

自然栽培稲作大全集

～ 第一巻 ～

必読! 知的なあなたが
お米と野菜選びのさらなるエキスパートになるために!!



まずは、上の写真をご覧ください。

この写真は収穫間近の稲の写真です。台風があった直後の写真なのですが、道を挟んで左側の稲は、きれい立ち上がっています。一方で右側の稲は、たわわに稔り、稲が倒れるほどになっています。

さて、ここで質問です!

左側と右側、どちらかが自然栽培でどちらかが有機栽培です。

いったい、どちらが自然栽培でしょうか。そして、その理由はどんな理由でしょうか?

「やっぱり、いっぱい実っている方が、自然栽培かな。」

「自然栽培はもしかしたら肥料使ってないから、すぐ倒れちゃうのかな。」

いろいろなお考えのあることと思います。

実は、答えは自然栽培が左側、有機栽培が右側なのです。それはなぜかということ……!

「肥料をたくさんやれば、稲が成長しすぎて倒れます。つまり、肥料の栄養分が多すぎて、イネの茎が必要以上に長く育ってしまうんです。そのことを徒長といいます。秋の収穫間近に台風の間雨で、そうしたひょろ長いイネは倒れてしまうんです。一般栽培はもちろん有機栽培でも、豚や牛などの肥料をやるわけですよね。追肥もやったりする。300坪（1反）あたり、窒素量で7から8kgくらいは入っていたと思います。本当に有機栽培といえど、いろんな問題があるのです。」自然栽培稲作農家の桑原秀夫氏がこのようにいうのです。

「収穫間近いイネは、倒れて水につかると、風味がガタ落ちになってしまいます。それこそ、ミステリーサークルが、田んぼ全面を覆ったように稲が倒れてしまいます。もし、この時、水につかっってしまうと、もうイネの味は1年の積み重ねが、吹き飛んで御破算になってしまうわけですね。」

稲は倒れて、水につかっちは、いけないのです。

米作りにおいて、イネを過剰に成長させないことは、一つの重要な技術になります。そのために水を夏場から切ったり、品種を改良したりとさまざまな技術があるわけです。しかし、有機栽培の稲は、肥料が多いから育ってしまいます。他の野菜でも同じです。肥料を使って大きくすれば、細胞が粗くなり、どうしても植物は弱くなるのです。

有機にしる、化学にしる、肥料でブクブクと育てることは、一見おコメのことを考えているようではありますが、人間で言えば、食べすぎでかえって体調を崩したり、健康を害していたりするようなもの。家畜で言えば、野生のたくましい動物に対して、厩舎の牛や鶏たちが、栄養たっぷりの餌をもらいながら、薬漬けでないと生きていけないのに似ています。どうやら人間が考える栄養が、植物と動物と人それぞれにとって、無理があることを私たちは知り始めています。

◇ **肥料で育ちすぎて倒れた稲は、味が極端に落ちてしまいます。肥料ってなんなのでしょうか。そもそも山や野原で草木は育つ。そんな姿に立ちかえることができると感じています。**

● **有機栽培の矛盾 ブナの植林をしながら、自然な農業をもとめ、感じ続けてきたこと** ～ 自然栽培稲作農家 桑原秀夫さんの話から ～

桑原さんは「美しい八郎湖を次代に残す会」の発起人の一人ですが、1992年から会でブナを植えられるています。宮城県気仙沼の畠山重篤さんの講演が、きっかけでした。

なぜブナを植えるのか。それは水とコメの安心安全を少しでも次世代につなげるためでした。桑原さんがいます。「ただただ、おいしい農産物を作りたい一心でした。しかし、本当においしいものを作るには、空気も、水も、土壌も、きれいでないといけない。そうでないと美味しいものは作れない。そう思うのです。だからこそ、私たちは、自然を汚してはいけません。」

稲作農家である桑原さんにとって、米作りは、もちろんおいしい米をつくること、おいしい米であることが第一条件だといいます。その次に本当に安全かどうかポイントになる。有機栽培と言えど、ピンからキリまでであると桑原さんはいいます。

そんな中、桑原さんが自然栽培に出会ったきっかけは、石山さんのササニシキを食べたことでした。その衝撃は忘れられません。何か違う、とても違う感覚だったのです。

「味が強いという印象ではありませんでした。なにか身体にフィットする味……。もちろん私は当時、秋田小町しか作っていないし、それしか味わってこなかった。しかし、品種だけの問題ではありませんでした。なにかが違う。そう感じてしかたなく、これは違う。やっぱり違う！もうやるしかないと思ったんです。」

そう桑原さんが感じたのは、有機栽培の矛盾に20年来、ぶつかってきていたからでした。

「有機栽培にもさまざま問題があります。100%ではないんですね。もちろん、きちんとやっている人もいますが、きちんとやっていない人もいます。本来、同じ田んぼでやっていくことが、当然、有機栽培でも原則になります。しかし、有機栽培では肥料や病気はなくなる。まして草はどうしても出てきたりします。除草の技術や探究心がなければ、正直、参ってしまいます。」

「そんな中、田んぼを使い回しする人もいます。田んぼを使い回すというのは、有機栽培の米作りを、田んぼの場所をかえて行うということです。何年かやって草がどうしようもなく出るようになったり、病気が治まらなくなったりしたら、田んぼを替え、草の出た田んぼは除草剤で押さえる。虫や病気が出た田んぼは農薬で抑える。そして草を根絶やしにして、虫や病気を押し殺して、また有機栽培をはじめ。このように田んぼを使い回す人すらいるのです。こうした人は、やっぱり一般の有機栽培に比べて重金属などが多く検出されたりして、世間が許さない状況に追い込まれるのだと思います。うそはつけないのだと思います。」

桑原さんはいいます。「有機栽培の米がおいしければいいが、おいしくはないんですよ。徐々に稲を倒してしまうのは肥料のせいだから、有機栽培とはいえ、肥料をたくさんやるのは、やっぱりおかしいと思うようになりました。有機栽培も当初は高く売れました。しかし、それでも、たくさん肥料をやって、倒した稲を販売してもおいしくなくて、結局、返品になることがありました。有機栽培といっても本当の有機栽培じゃなかったんです。」

有機栽培では、虫や病気はなくなる。草もなくなる。これは農業の現場での事実です。有機栽培の理念はすばらしい。しかし、肥料を使うことで、有機栽培のそもそもの理念から、ボタンの掛け違いのように、ずれてきているわけです。それでも、有機栽培を志す方の多くは、よりよい農業を求められています。そうした中で、桑原さんも自然栽培にたどり着かれたわけです。

- ◇ 有機栽培では草や病気はなくなる……。だから農家は、田んぼを替えたり、農薬や除草剤を使わなくてはならなくなったりする。今だけ無農薬なのか、ずっと無農薬でできるのか、その違いを見極める必要があります。
- ◇ ブナの植林から、有機栽培の実践、自然栽培との出会いにみるように、自然な農業にかける農家の生き様を知り、共感するコメを選びたいものです。
- ◇ 農家も“うなる”自然が生み出すコメの味わいを少し意識してみると、農家の顔と田畑が思い浮かびます。

■ 自然栽培を疑おう！ なぜ、自然栽培なのか なにが自然なのか

感性を磨き、ちまたに溢れ始めたさまざまな自称自然栽培を見抜く目を！

● 自然栽培もさまざま

有機栽培における畑を変えるという問題。こうしたことは、有機栽培だけの問題ではありません。私たちナチュラル・ハーモニーは 25 年前から自然栽培の普及に邁進してきました。自然栽培の認知は徐々にではありますが、進んできていると思います。まさにそれは、これまで自然栽培に先駆的に取り組んでこられた農家の方々の、それこそ血のにじむような努力の成果であると感じています。

そんな中、自然栽培や自然農法といえど、法律的な定義がないために、さまざまな自然栽培や自然農法が存在しています。

それこそ、中には家畜糞尿の肥料を使う自然農法もあります。微生物資材、微生物農薬、漢方薬や自然素材を使った農薬を使っているものもあります。植物性の産業廃棄物。米ぬかやおからを土に入れるものもあります。その産業廃棄物となる素材の生産・製造過程で、どんな農薬や化学物質が使われていたかはわからないことがほとんどです。そして肥料を前年まで田畑に与えておいて、何年かだけ無肥料にして自然栽培だと名乗るものもある可能性があります。そして、年月が経ってできなくなってきたら、また畑を変えて肥料を入れるのです。

大豆や緑肥を与えて、なんとか肥料を与えない分、チツソを補おうとしているものもあります。植物にも栄養分の高いものもある。または、毒性の強いものもある。その植物が本当にその田畑の自然に適しているかどうか、肥料成分がないか、毒性がないかということが問われるべきなのです。

● 自然栽培は過去の清算なしには成り立たない！

また、肥料・農薬をやらないだけで、土に人間が施してきた過去を清算しようとしなない農業もあります。これらすべてが同じ自然栽培、自然農法の中でくられていきます。中には人はなるべく関わらない方がいい。自然のまま放任するのがいい。だから耕さない方がいい。機械は使わない方がいい。そんな自然農法もあります。それは、理想かもしれませんが、過去の清算、つまり土にこれまでにし

てきた人の罪を、土から取り除く。具体的には農薬や肥料を土から取り除き、浄化しないかぎり、なかなか農業経営としては、成り立っていないのが現状です。

つまり、これまで土に対して使った肥料や農薬をきれいにしていくというプロセスを、本来の自然栽培では大事にしています。汚すだけ汚しておいて、これからは気をつけるから許してくださいでは、自然界は許してくれない。そのことを私たちも、身に染みて教えられているところなのです。

土の過去を清算しないで、肥料・農薬をやらないというのは、人に置き換えれば、今までの食生活で身体を悪くして、その身体の毒素の解決を考えないで、今日から健康にいい生活をしているから、もういいのだというようなものです。人間には腎臓や肝臓の解毒の作用があります。大腸や小腸を通して体外へ排出することもできます。

これに対して土壌は地下水に流すか、雨・風・熱で焼いたり、流したりするか、植物によって吐き出すしか方法がありません。今の土は随分と汚れています。まさに人でいえば、腎不全や肝機能障害といったところなのです。この過去の清算をしなければ、弱りきった身体を回復することができないのです。土において過去の清算とは、これまでに使ってきた肥料や農薬を浄化していくことを意味します。人が機械を使ったり植物の力を借りたりして積極的に行う必要があるのです。

本来の自然栽培の目指すところは、土の過去の清算をすることです。つまり過去に使われてきた肥料や農薬を取り除いていくことで、大自然に本来備わる土の偉力、大自然の力を発揮しようとするものです。土の過去、つまりこれまでに使った肥料や農薬などの、残留物を総して「肥毒」と呼びます。

「肥毒」を取り除くことに自然栽培農家は意識を向けていく必要があります。そして大自然の潜在能力を受け止められる理想とする土を作る必要があります。それが「あたたかく、やわらかく、水もち水はけのいい土」です。

田んぼならば、いかに水で「肥毒」を流すか、いかに、土を起こしながら肥毒を抜くのかといったことを農家は考えるのです。

● 農薬を使わなければ自然淘汰されてしまう米や野菜

また微生物農薬にしる、漢方や自然素材を使った農薬にしる、これらは作物に起こった病気や虫を、対処して殺すという発想です。これに対して、ナチュラル・ハーモニーが多くの自然栽培農家とともに研鑽する自然栽培では、病気や虫は土の過去を清算するために、過去に使われた肥料や農薬を、植物の体を通して、虫や病気によって浄化してくれていると捉えます。だから、対処療法で作物を維持することはしないのです。

微生物農薬にしる、漢方薬にしる、化学農薬にしる、自然素材を使った農薬にしる、農薬を使わなければ米や野菜が育たないということは、いわば、農薬がなければ、自然界に淘汰されてしまう植物であることを意味しています。その植物が、本来人間の食べるべき食べ物ではないことを虫や病気が教えてくれているといえるのです。もしかしたらスーパーに並ぶ農薬を使ったお米にしる、有機栽培

という名前で販売していたお米にしろ、ちまたに登場しつつある、さまざまな自然栽培のお米にしろ、残念ながら無理やりに形を維持した農産物なのかもしれません。

● 肥料が虫や病気の原因!



上の写真は、秋田県南秋田郡大潟村は大潟村自然栽培グループ石山範夫さんの自然栽培歴3年目のお米と、当時まだ行っていた、アイガモ農法の有機栽培のお米とを、瓶詰めにして比較実験したものです。左側の2つの瓶はアイガモ農法の有機米です。黒いカビが発生して真っ黒になっています。右側の2つの瓶は自然栽培3年目のお米です。発酵して甘酒のような味がします。

同じ生産者の有機栽培と自然栽培で、これほどの違いがあったのです。同じ生産者の同じ環境下で作られたお米でも、アイガモ農法ではどうしても、鳥の糞が田んぼに過剰に入ってしまう、お米の風味もおちてしまいます。

このことに愕然とされた石山さんは、自然栽培への決意を強くし、いまでは全面積を自然栽培で取り組んでいらっしゃいます。過去の清算が済むまでは自然栽培米でも、腐ることもあります。しかし、肥料を使わず土から過去の清算が進めばせいほど、米も野菜も腐らず、確実に発酵しやすくなるようです。

動物の糞尿や、栄養分の多い植物、そして化学合成された肥料にせよ、なにかしら肥料を使うということは、物質的な何かを与えて収穫するという発想が根底にあります。作物は栄養分、物質を与えなければ育たないという発想が脈々と根底にあるのです。作物を田畑から収奪するのだから、栄養分を補わない限り、作物は育つはずがない！これが常識です。しかし、結果肥料は、虫や病気を呼びます。写真のように、米が腐りやすくなります。イモチ病などの病気も減ることはありません。桑原さんのように有機農家の多くが、肥料を使うことの限界を感じています。そして肥料を使わないことで、虫や病気が減っていく実感をもっていらっしゃるのです。

● 痛め続けられる田畑は、あなたにとって食のリスクを溜めるダムのようなもの

肥料にはさまざまな素材が含まれます。家畜糞尿の抗生物質による薬剤耐性菌のリスク。家畜飼料の栽培過程で使われる農薬、家畜飼料の遺伝子組み換えのリスク。これらは家畜糞尿として、肥料に混入されます。下水処理の汚泥が肥料に混入することも、その他、お茶かすやナタネ粕など、さまざまな栽培過程の農薬・肥料使用の可能性が高い産業廃棄物が、肥料に含まれます。これらが肥料に含まれながら田畑から、地下水を汚す可能性があります。さまざまな添加物、薬剤、農薬、肥料にまつ

わる化学物質が、私たちの食を担う田畑に持ち込まれ続けているのです。

野山の草木は、肥料がなくとも年々育っています。岩場の松の木も育っています。庭先で落ち葉を毎日掃いている柿の木も、毎年、柿の実を実らせています。そして、実際にプロの農業として30年間、肥料や農薬を使わなくても生活できている実績があるのです！肥料により自然界のリズムを崩し、その浄化・再生のために働いている虫や菌たちを農薬で殺す。土を再生しようとする草たちを除草剤で枯らす。このようなことを繰り返し、食の源である土をまるで毒のダムにしているとさえ思うのです。

● ナチュラル・ハーモニーの自然栽培の定義

ナチュラル・ハーモニーそして、ハーモニック・トラストがあなたとともに取り組みを支える自然栽培は、一切の肥料・農薬を使用しません。「自然栽培」の定義は自然界を教師にして、自然から学び、自然を尊びながら自然に添っていく。そして大自然の法則を田畑に応用するという農法です。

ナチュラル・ハーモニーで取り扱う自然栽培は、先駆的自然栽培農家とともに、研鑽のすえ策定した、「自然栽培基準」に沿って栽培する農産物です。農家は膨大な年月を費やして、土づくり、タネづくりを行います。いわば“土からもタネからも逃げない”、そして、肥料や農薬に頼ることなく大自然の潜在能力を田畑に発揮することを以って「自然栽培」と呼んでいるのです。

目的は、本当に農家に自然栽培で経営を成り立たせてもらうために、必要なことを基準にしています。本来の自然に添っていくための基準なのです。前述のように、肥料や農薬を入れなければそれでいいということではなく、先駆者の失敗に学び、自然栽培に取り組み、人が損をしないための基準です。自然に向かいながらの失敗は、なにが自然かを教えてくれます。その失敗を繰り返すことなく、自然に近づき、田畑の潜在能力を引き出すための基準なのです。

そしてそれは、本当により安全で自然な食べものを求める消費者、暮らし手のプロであるみなさんが惑わされないようにするためのものでもあります。より自然に向かい、肥料や農薬に頼らず、田畑の潜在能力が引き出されて命を結ぶ植物は、私たち食べる人間にとっても、自然な食べ物なのだと確信しているからです。大自然の潜在能力を発揮しようとして、シンプルに自然に向き合う自然栽培という名の農業は、自然に即している以上、自然の中に生きる私たちすべてにとって、自分自身にあったものになるのだと思うのです。

本来の自然栽培を目指した取り組み。そして土の過去を清算することで、つまり過去に使われてきた肥料や農薬を取り除いていくことで、大自然に本来備わる土の偉力、大自然の力を発揮しようとするものです。つまり「肥毒」を取り除くことに自然栽培農家は意識を向けていく必要があります。そして大自然の潜在能力を受け止められる理想とする土を作る必要があります。それが「あたたかく、やわらかく、水もち水はけのいい土」です。

● ナチュラル・ハーモニーの自然栽培.1

～土を掘って土を見て土の歴史を知る～

自然栽培に取り組み農家さんには、土を掘っていただいています。そして土質を見ていただきます。肥毒があるのか無いのかを見ます。過去に使ってきた肥料や農薬の状況を確認します。そして、周り

の地形を確認します。山だったのか田んぼだったのか、川のそばなのか海の近くなのか、川ならば上流か下流かなどを観察します。土は砂なのか火山灰土なのか、礫なのかなどなどを見るのです。そして、健康診断をした後に、その症状に合わせて計画を立てていただきます。

● ナチュラル・ハーモニーの自然栽培.2

～同じ土に継続して向き合う、自然栽培の圃場登録～

この肥毒を抜くことと、水もち水はけを良くすること。この自然栽培をまず一定の土地で継続して取り組むことを農家さんには決めていただいています。一度自然栽培に取り組むと決めた場所、土地に関しては、継続して半永続的に自然栽培に取り組むこととなります。なぜなら土から本当に肥料や栄養分が無くなったとき、大自然の力が発揮され始めるからです。

それこそ、雑草が育たなくなるくらい土になって、はじめて自然の力が発揮されるといいます。そして圃場登録という手続きをして、その田畑の地図を提出していただき共有しています。

● ナチュラル・ハーモニーの自然栽培.3

～自然栽培の土作り計画～

土の過去、土の状態を診断して、10年、20年かけて理想的な土を作っていくための計画を立てます。これが自然栽培における「土作り計画」です。経営を守りながら過去を清算するプログラムを立てるのです。自然栽培に取り組むに当たり、一度はできなくなる場合もあるので、少しずつ経営を圧迫しない面積から取り組んでいただいています。

半永続的に取り組む場所を決め、土を診断し、土の過去を清算し、「肥毒」を抜き、大自然の力を発揮できる土をつくる計画を10年、20年の長さで考えていただいているのです。

● なぜ、土をみて、圃場を決め、土作りの計画を持つ必要があるのか!?

このように自然栽培は、肥料や農薬を与えなければそれでいいという農業ではないのです。私たちが、自然栽培をこのようにお伝えするのは、なにも私たちが正しいと言いたいものではありません。本当に自然栽培を成功させるには、肥料・農薬を与えないだけでは無理なのです。肥料・農薬を使わないだけでは、現場の農家さんはやはり、できないという現実を突きつけられます。どんなに信念のある方でも、経営がぐらつけば、思いもゆれます。そうしたタイミングで家族の批判、地域の批判は、高まります。本人が揺れたときほど高まるのです。本当に成功するには肥毒を解決し、土をはじめとする環境の上に生きる植物の生きるプロセスに向き合っていかなければならないのです。それは農家の言葉で言えば、植物の生き様に向き合うことです。

● 私たちの失敗 自然栽培での失敗から自然が見えてくる。

肥料と農薬を使わないだけでは、自然栽培はできない！！

正直、申し上げて、私たちもこうしたことがお伝えできるようになってきたのは、さまざま先駆者と研鑽を重ねてきた、ここ10年のことです。それまでは前述のように、ある意味、ただ肥料・農薬を使わないでくださいとって取り組んできました。そのことで、何人かの農家さんの生活はひっ迫してしまったりもしていました。もちろんそれぞれの農家さんは自己責任のもと、ご自身の決断として、取り組んでくださっています。

当時からやり抜いてくださっている農家さんは、それは他にはない自然観というものを掴んでいる方もいらっしゃる。しかし、ただ肥料・農薬を使わないというだけでは、結果、作物はなかなかできないのです。

生活のかかっている農家さんは、作物ができなければ、「米ぬかくらいはいいじゃないか？自然なものだし。」「緑肥くらいはいいじゃないか。」「生物農薬くらいはいいじゃないか？」「動物の糞尿も自然のものじゃないか？」と不安と疑問がもたげ、常識が邪魔をしてくるのです。「やっぱり自然栽培はできない！」という結論を出すことは、ある意味、あまりにも簡単です。これまでの常識の中に戻るだけなので……。

それこそ肥料や農薬を使わないというのは、今でも、そんなことを言い出せば地域で、特異な目で見られてしまいます。本当に変わりもの扱いされてしまうのです。そんな中で、当たり前に見せながら、地域の人の理解を得ながら、全国の先駆的農家は取り組んでいらっしゃいます。

● 私たちの失敗 自然栽培をなぜ断念せねばならなかったのか

私たちの関わる中で、自然栽培はやっぱりできないと断念された方は、今のところ一人だけです。方向性がやや違って、微生物資材を使っている方は何人かいらっしゃいます。それはそれで信念をもった歩みなので、仕方のないことですが、私たちとしては、自然栽培として取り扱えないということもあります。

その断念された方も、信念の強い人柄のよい方でした。若いころ仲間を農薬でなくし、より安全な農業を目指されていました。それでもやはり高齢でもあり、私たちも再三、さまざまな形でアプローチをしたのですが、なかなか後から肥料や農薬を抜いていくという話をして、伝わらなかったケースでした。断念されるという結果。本当にこのことは私たちにとっても、自分たちの存在意義すら問われる残念なことでした。

● 肥料や農薬を使わず放置するだけが自然ではない

過去の肥料や農薬を、放置するのは自然ではなかったのです。田畑という自然環境では、人も加わることで、その環境を悪化させることもでき、浄化のスピードを速めることもできるのです。過去の清算は人も自然もせねばならない。その過去を清算し、未来をつむぐ。田畑一枚一枚からの日本列島を無農薬化し、いわば、地球の洗濯をしていく。それがこの自然栽培の一つの使命です。

● 自然農法成田生産組合での事例

自然農法成田生産組合は1975年から自然栽培に取り組むグループです。中心的人物である高橋博氏とともに、私たちも全国の農家に自然栽培の普及活動を行っています。そんな自然農法成田生産組合でも、30年の歴史の中で、肥毒に行き着いたのは、20年前です。自然栽培に取り組むようになって10年たったころです。その後、10年間かけて確認し、肥毒を取り除くことをさまざま実践してきました。そして10年ほど前にやっと確立できたといいます。その間、無肥料・無農薬でやっていた間は、農産物もなかなかできなくて、自然栽培の思いや取り組みに感動して、スタートした数々の生産者も、中にはやむを得ず、やめていく人もあったといいます。

肥料・農薬を使わないだけでは、自然栽培はできない。改めてそれが、現実なのです。

● 繰り返されすぎた失敗から学ぶ

有機栽培にしる、一般栽培にしる、前述のちまたにあふれはじめた擬自然栽培にしる、肥料や農薬が土にあり、大自然の力を止めているという原因に立ちかえって判断しない限り、対処療法を繰り返すしかなくなるのです。結果、農家は続けられないという判断をしなくてはならなくなります。つまり、「自然栽培なんてできるわけがない！」という結論を出すことになるのです。そうした結論を出すことは簡単です。そしてそうした失敗は、さまざまな場所で、これまでにあまりにも繰り返されすぎたと思うのです。さもなければ、ナチュラル・ハーモニーが起業する 1985 年以前にすでに自然栽培はあったわけで、もっと広まっていたよかったです。

● 疑問を投げかけるべし

自然栽培だといわれても、私たちは立ち止まって聞かねばなりません。本当に肥料・農薬は使っていないのですか？ 田畑は継続して取り組んでいるのですか？ 過去に使った肥料や農薬への対応はどのようにされていますか？ こうした視点を持つ必要があります。

● 「売れるからやる」ではできない！

「売れるから自然栽培をやってみたい！」「買ってくれるならやるよ！」こうした言葉を最近たまに耳にすることがあります。しかし、「売れるからやってみたい！」「買ってくれるならやるよ！」だけではこの農業はできません。「肥毒」を取り除かない限り、どこかでごまかすか、やめるかせねばならなくなるのです。だから、新たに取り組み始める農家さんとは、「肥毒」をはじめとする自然栽培の理念、原理、そして土作り計画や圃場登録など、しっかりと打ち合わせを行った上で、取り組みはじめていただくようにしています。

● 同じ苦しみを味わわないために！

世の中に自然栽培が広まることは私たちにとって本望です。しかし、それが本当に大自然にあった農業でなければ、本当に広がることはできず、農業者をはじめとして、それにまつわる流通業者・消費者が苦しむということ、事前にお知らせする必要を最近しみじみと感じています。それは、自然栽培を先駆的に実践してこられた農家の方々も同じ思いなのです。「自分たちと同じ苦しみをこれからの人が味わう必要はない！」多くの自然栽培農家がそういうのです。私たちも流通業者として、「自然栽培は売れるから」、「だれだれさんの本を読んで、今の有機栽培では付加価値がつかないから」では自然栽培はできない、そのことを農家さんにはお伝えしています。

幸い、私たちが、ご縁をいただいている農家さんの多くは、真摯に現状の農業の問題に向き合い、自然栽培に行き着き、着実に実践してくださっています。今、私たちの目の前には、肥料や農薬に頼らずできているという事実があります。できる方法があるのです。できるにはできるわけがあったのです！

だからこそ、大自然を師とし、大自然の力を引き出す農業の可能性を農家さんと共に研鑽するようつとめています。自然の偉大な力、つまり田畑の潜在能力を發揮させる自然栽培。できるようになる

には大自然に学び、大自然の有様を尊び、大自然に沿っていく姿勢が強く求められます。田畑の潜在能力を発揮させるために、理想の土を作っていく必要があるのです。なぜできるのか、どのようにすすめていくかをしっかりと共有していくことが、私たち流通業者の責任でもあります。

● ナチュラル・ハーモニーの自然栽培4

～作付け政策～ 圃場登録した田畑に対し、生産依頼をし全量または必要量、買い取るしくみそして、私たちは圃場登録をして作付けをして、これだけやろうとなった作物の栽培計画された量を全量買い上げる契約をしています。それによって、農家さんには安心して生産に注力していただけるようにしているのです。ハーモニック・トラスト会員のみなさんが自然栽培を支えてくださることにより、農家さんは大地を清浄化し、自然の力を田畑に結集することに集中して取り組むことができます。本当に大きな支えとなっているのです。一般的に流通業者は、必要な量を必要なだけ買い取るという仕組みです。全国の生産地を次から次へといいところ取りをしていくということです。

農家が生産だけでなく、販売まで意識することは、非常に不合理なことです。ただでさえ、未知のリスクのある自然栽培の取り組みなのですから……。これまでの現代農業の歴史は、流通が農家を苦しめ、消費者を裏切り、農家が流通をだまし、消費者をだます。消費者は安い、便利、簡単といった利便性だけを求める。そんな関係だったのだと思います。それは、いわば今の社会の縮図です。そこに一石を投じて、経済面でも信頼を回復しようとする試みといえます。

● 心と物の両面 買い支えつながりを作る

しかし、茨城県行方市の仲居主一さんという自然栽培農家がいいです。

『安心安全』って、それは本当の意味での信頼関係がないからだよ。本当につながりがあるなら、相手をお互いが思えるなら、安心安全は求めなくてもよくなるはずだ。自然に向き合えば、農薬や肥料はおのずから使わなくなる。そこに安堵感がすでにあるはずなんだから……。

もちろん、これまでも、いつの時代も争いは絶えなかったかも知れません。しかし、本来の作り手とつなぎ手と暮らし手の関係が取り戻されたとき、安心安全は当たり前ものになるのではないかと思うのです。

● 本来の職業 本来のプロフェッショナル 本来のビジネスは世の中を変えよう

作り手は作り手のプロとして自然を極めていく。つなぎ手はつなぎ手のプロとして、物だけでなく、自然の意義、作り手の心を伝え流通していく。暮らし手は、日々、暮らしながら消費という選択をし、生活に取り組むナチュラルライフのプロとして、自らの健康を心身に築きながら、社会に購買を通して発信していく。こうした本来のプロとしてのあり方、本来のビジネスは世の中を本来の姿に変えよう力すらもてるのではないかと思うのです。

その土地の過去を知り、過去を清算し、未来をつむぐ。田畑を浄化し、田畑の潜在能力を発揮し引き出す農業。そんな自然に向かう農業に学べることは、汚しつくした身体と土の汚れをきれいにしてゆくことができるということです。自然栽培はそんな田畑一枚一枚から始まる地球を大洗濯する取り組みなのです。

大自然への敬意を私たちの日常に取り戻すために！

以下は、ニコルズ・フォックスの著書「食品汚染がヒトを襲う」からの引用です。

自然と農業と人とのかかわりについて示唆にとんだ言葉です。

農業は大自然のなか以外では行えない。それゆえ、もし大自然が繁栄しなければ、農業も繁栄できない。だが、われわれは大自然のなかにわれわれも含まれていることも知っている。大自然とは、われわれがその外側のどこかの安全地帯にいて、手を伸ばせば中まで届くというような場所ではない。われわれは、それを利用しつつも、その中にいてその一部となっているのである。それが繁栄しなければ、われわれも繁栄できない。それゆえ、農業の適切な指標となるのは、世界の健康とわれわれの健康である。しかも、この二つは、必然的に同じ一つの指標である。

われわれと食品との複雑な関係のなかに、ふたたび投入すべきキーワードは「敬意」である。動物たちのいのちに対する敬意、いかにして食品が育てられ収穫されているかに対する、収穫や調整を行う人々に対する、そしてなによりも、われわれ自身とわれわれの家族と、われわれの肉体の中に取り入れているものに対する敬意である。

もし、生命にはなにか神聖なものがまどわりついているとすれば、それはすべての生命にもおよんでいる。重要なのは、たとえば動物性食品の摂取を拒否することではなく、動物の生命を育て、殺し、消費することがふたたび神秘的な神聖さを取り戻し、深い畏敬の念を払われるようにすることであり、大地への崇敬、そして大地を、敬意をこめて念入りに育て、管理したときに、相手がわれわれに提供してくれるものへの崇敬を取り戻すことであり、そしてなによりも自尊心を、明確な経済的収益をもたらさない場合でも、人間活動に価値を与える自尊心を、取り戻すことである。

こうした敬意をわれわれが取り戻したとき、食品はより安全になるだけでなく、より美味になり、その過程のなかでわれわれは、生命の神聖さばかりでなく、生きていくことの神聖さに対してもよろこびを取り戻していくことになるであろう。